

コルビエールでパンチのある自然派ワインを作り上げる実力派女性
カトリーヌ・マラン・ペステル
(トレイユ・ミュスカ)

生産地

ペルピニャンから北西に 50 km ほど内陸に入った、ピレネー山脈の裾野、旧カタロニア地方のちょうど国境沿いにトレイユ・ミュスカのあるパーデン村がある。旧国境地を思い出させるかのように、村の周囲の切り立った崖の上にはかつてカタリ派の要塞で今は廃墟となったシャトーが所々に点在する。また、パーデン村は AOC コルビエールと、AOC フィトゥウの狭間でもあり、隆起したむき出しの岩盤が入り組む複雑な丘々に囲まれ、地中海性気候下に微妙なミクロ気候の影響を受ける。

歴史

ルーブル美術館で働いていたパリ育ちのカトリーヌが、1999 年コルビエールに 6 ha のブドウ畑を買い、ワイン作りに情熱を注ぐ。2001 年まで近く農協にブドウを売りつつ、農協のワイン作りに自らスタージュとして参加しながら、ワインの仕事を覚えていく。スタージュの間、近くで自然派ワインを実践していた、マキシム・マニヨンやドメーヌ・フラー・ルージュのジャン・フランソワ・ニックの影響で、彼女も独立後はヴァンナチュールの世界に没頭していく。自然派の仲間たちの教えを請いながら作った彼女の最初のワインは、「自然派の寵児」として瞬く間に注目を浴び、現在では南仏における自然派ワイン生産者の常連としての地位を確立する。

生産者

現在はオーナーであるカトリーヌ・マラン・ペステルが 1 人で 6 ha の畑を管理している。(季節労働者数人が常時手伝いに入る) 彼女の所有する品種は、赤はグルナッシュ、シラー、カリニャン、白はマカブー、マルサンヌで樹齢平均は赤が 50 年、白が 50~100 年である。「とにかく始めるからには、一番良い畑をかう！」と決めた彼女は、離れて点在する小高い丘の上の、今となってはトラクターが入れない小さな区画の投げ売りに出されていたヴェーユヴィーニュを買えるだけ買ったという。その甲斐あって…毎日が極限の肉体労働の生活だという。

ちよつと一言、独り言

初めて、トレイユ・ミュスカのあるパーデン村を訪れた時、同じラングドックと言えどもこんなに地形が違うのか！という驚きの印象があった。私の当時住んでいたベジエ市の隣村カラントから 100 km も離れていないのに、ナルボンヌ市を過ぎた辺りから、プレートが押し出されたであろう、斜めに隆起したむき出しの岩盤がそのまま山となり丘となり姿をあらわす。よくラングドックは、プロヴァンスよりも「洗練されていない、手つかずの野生が残っている」と言われるが、まさにこのことを指すのだろうと思った。

カトリーヌの畑も、まさに手つかずの野生の中にぼつんぼつんと点在していて、一目見て「ここは仕事が大変そうだな…」という印象を拭いきれなかった。「私にとって、畑仕事はスポーツ。ごつごつした岩間を登ったり下りたりしながら作業をする。毎年毎年、慣れるまでは毎晩筋肉痛よ！」と明るく話す彼女はとことんポジティブ思考で、仕事を心から楽しんでいる感じを受けた。

勉強家で、分からないことがあればすぐに近くに住んでいるマキシム・マニヨンや、少し離れたところにあるドメヌ・レ・フラー・ルージュのジャン・フランソワを訪れアドバイスを請う。彼らのアドバイスに触発され、今年 2005 年から赤のマセラシオンはほとんど全てスミマセラシオン・カルボニックに変えたという。「思い切った賭だけど、より素晴らしいワインになる可能性があるのなら、いろいろな方法をチャレンジしたい」と、あくまで前向きな意見。実際に、まだ発酵途中の 2005 年 AOC コルビエールを試飲したが、果実実が全面に押し出され、それでいて薄っぺらさはない、彼女のワインの持ち味であるパンチの効いた力強さも兼ねた素晴らしいものを想像させる仕上がりを見せている。「すべては、私より長く生きているブドウの樹たちが決めること。私の仕事は、彼らの信号を忠実に受け止め、彼らの望む個性をワインとして表現してあげるだけ」という彼女は、実際、まだまだ十分にブドウの個性をワインに反映でききれていないと考えている。常に前向きにチャレンジする彼女には、どうやら「安定」という文字はなさそうだ。

そんなポジティブな彼女も、悩みがないかと思いきや、毎年ワイン作りの行程のなかで、一番に頭を悩ませていることがあるそうだ。それは何かというと「イノシシ！」だ。「ビオだから？古樹だから？ブドウが美味しいのかは知らないが、毎年、イノシシの食い荒らしによる被害は尋常ではない。うちのワインがイノシシの肉に合うのは当たり前！だって、うちのブドウをたくさん食べているのだから！」と冗談交じりに話してくれたが、実際は笑い事ではないようだ。

2005 年も被害は 20～30%におよび、特に最悪なのは、イノシシはブドウを均等に分散して食べるのではなく、食べるブドウの樹は集中して全ての房がまるまる食べられてしまうため、収穫時にブドウの房がゼロ！という樹をたくさん目にするそうだ。畑を電線で括ろうにも、畑のある場所自体がケモノが通る道になっていることと、小さな畑をいくつも点在して持っていることから、今のところは効率よく追い払う方法が見つからないのだという。

「私が狩の免許を持っているのだったら、ぜひとも仕留めたいわ！あのケモノたち！」って、もうぜひ仕留めてください♪

彼女の話聞きながら、不謹慎ではあるが、昼も間近だったこともあり、ふんふんと肯きつつも頭の中はイノシシのグリエを食べながら彼女のワインを飲む想像をしていた…さぞかし美味しいのであろう。。。